

ダイテス領攻防記 5

A black and white illustration of a character introduction page. The page is decorated with large, stylized flowers and lace patterns. On the left side, there are five character portraits with their names and descriptions in Japanese. On the right side, there are two more character portraits with their names and descriptions. At the bottom right, there is a banner with the title '登場人物紹介' (Character Introduction).

クラリサ

ミリアーナの侍女。
BL好きの貴腐人でもある。

コシス

マティサの忠実な臣下。
家督を弟に譲り、
主についてダイテス
まで来た。

トゥール

「無敗王」と呼ばれる
西の国
エチルの王。

ナリス

「虐殺人形」と呼ばれる
南の国
ハヤサの王。

トウザ

南の国ハヤサの王太子。
マティサと
仲が良い。

ゲイン

「強欲王」と呼ばれる
東の国
カイナの王。

マティサ

オウミ王国の元王太子。
廃嫡されて、ダイテスに
婿養子としてやって来た。
「黒の魔将軍」と
恐れられている。

水谷美有

腐女子人生を
謳歌していたOL。
事故で命を落とし、
ミリアーナとして
転生。

ミリアーナ

辺境の地ダイテス領の公爵令嬢。
BLをこよなく愛している。
快適な暮らしと萌えを求め、
オーバーテクノロジーで
異世界を改革中。

登場人物紹介

目次

ダイテス領攻防記 5

7

山百合の追憶

247

異端のススメ

281

ダイテス領攻防記 5

プロローグ 転機は突然に

「クラリサ・シュライア殿との結婚のお許しをいただけるでしょうか？」

見事な銀髪を持つ腹心の突然の申し出に、主夫婦は驚いた。

オウミ王国の最北端に位置する辺境の地、ダイテス領。その領地の次期公爵であるマティサ・

ダイテスに仕えているのが、今結婚の許可を求めたコシス・カティラだ。

彼はマティサが王太子であった時から忠誠を誓い、主の失脚後も家督や地位を異母弟に譲り、

ダイテス領までついてきた忠義の士。

銀髪の美丈夫で、水色の瞳からは伶俐さがうかがえる。

長身の引き締まった体躯のコシスは、今、わずかに頬を紅潮させていた。

そして彼の後ろに控えた女性もまた、頬を赤らめ恥じらっている。女性にしては背が高く、栗色

の髪を持つ楚楚とした美女だ。彼女——クラリサ・シュライアは、ダイテス公爵家の一人娘ミリ

アーナの侍女であり、自分を越えた信頼で結ばれた友でもある。

クラリサの主、ダイテス公爵令嬢ミリアーナは目を丸くした。

「昨日の今日で、何があつたのよ！」



ミリアーナがそう叫ぶ隣で、美貌の夫マティサは複雑そうな表情をしている。

二日前、オウミ、エチル、カイナン、ハヤサの四ヶ国が同盟を結び、オウミの王城で祝宴が催された。他国の王族も多数集まり、宴は賑やかに幕を下ろしたのだが、その翌日、ミリアーナが攫われるという事件が起こった。

激怒したマティサは、王都のダイテス家の手駒すべてと持ちうる伝手を総動員して、ミリアーナを探した。幸いダイテス公爵家に仕える優秀な密偵がその日のうちにミリアーナを発見、救出して事なきを得たのだが――

さらに一日後の今日の午後、突然コシスとクラリサが結婚の許しを請いに来て、ミリアーナは心底驚いた。

もとより、お似合いの二人だと思い、コシスとクラリサをくつつけるべく画策してきたミリアーナ。根回しをして外堀を埋め、さあこれから……という時にこの事態である。言うなれば、外堀と内堀を埋めきって本丸を攻めるべく意気を上げている時に、相手が降伏してきたようなものだ。

肩すかし感が半端ない。

思わずミリアーナは二人を問いつめた。

「昨日の朝までは普通だったわよね？ それが今日になって結婚って、唐突すぎない？ 私の知らないところで何かあったの？」

「いろいろあったのですわ、お嬢様！」

クラリサは、恥ずかしそうに顔を両手で覆った。

コシスも、顔を赤らめたまま叫ぶ。

「仔細はご容赦ください！ お方様！」

「嫁、そこは突つこんでやるな！ 流せ！」

マティサは、コシスをかばうように言った。

昨日、ミリアーナを攫われたマティサは、『キレル』寸前であった。

この世界には魔力があふれており、それは時に人にも宿る。魔力の宿った者は“加護持ち”と呼ばれ、精神に加護を持つ者は不思議を操る魔術師となり、肉体に加護を持つ者は人間離れた身体能力を発揮する。

マティサは、『王になれるほどの加護を持つ』王級“加護持ち”だ。しかしこの王級“加護持ち”は、稀に『キレて』暴走状態に陥る。

ミリアーナの誘拐を知り暴走しそうだったマティサは、周囲にとつともない心理的重圧をかけたことを自覚していた。

そんな戦場にも勝る重圧や危機感から解放されたコシスは、昨晚、籠が外れてしまったのだろう。戦闘後、生の実感を得るため人肌を求める者は多い。

コシスがクラリサとそうなってしまう要因を作ったのは、マティサである。

マティサは、コシスの結婚を認めるつもりだった。

ミリアーナにも、疑問はあっても異論はないだろう。マティサは、小柄な妻ミリアーナに目を向けた。

「いったい何があったし？」

黒髪を揺らして、首を傾げるミアーナ。童顔で可愛らしいが、貴族にはよくいる程度の容姿である。

しかしミアーナは、決して平凡な人間ではない。

前世の記憶を持っているのだ。

彼女の前世での名は、水谷美有。異世界の日本という平和な国に生まれ、二十四歳の時、事故によって命を落とした。

あちらの世界は、ミアーナが暮らす今の世界より文明がかなり発達していた。前世の感覚からすれば、こちらの世界は中世ヨーロッパ程度の文明しかない。

美有としての記憶があるだけに、ミアーナにとつてこの世界はずいぶん暮らしにくかった。

そのためミアーナは、前世の記憶を頼りにダイテス領で産業革命を起こした。

小説の執筆を趣味とし、腐女子でオタクだった美有。彼女は歴史に並々ならぬ興味があり、可能な限り歴史や雑学を調べていた。その知識とこちらにある魔法を組み合わせて、あるはずのない文明の産物——オーバーテクノロジーを作り出したのだ。

ミアーナは前世の知識をもとに内政も安定させ、辺境ながらも、ダイテスは驚くほど豊かな地となった。

王命でダイテス公爵家に婿入りしたマティサには、これらの秘密を結婚初夜に打ち明けている。

彼は、柔軟にその事実を受け入れてくれた。

オウミ王国のユティアス王が婿入り先にダイテス公爵家を選んだのには、理由がある。

王級「加護持ち」を嫌う王妃リサーナと、彼女を擁する貴族たちによって廃嫡の憂き目に遭ったマティサ。しかしユティアスは、何かあればマティサを王族として復権させるつもりだった。そのため、爵位は高いが力のない家として、ダイテス公爵家ならば有事の際に離縁もさせやすいと考えたのだ。

オウミは大国だが、決して安泰とは言えない状況が続いていた。

大陸中央に位置し、北を竜骨と呼ばれる高い山脈にさえぎられたオウミ。

竜骨の途切れる東にはカインアン王国、西にはエチル王国があり、どちらも王級「加護持ち」の王が治める大国だ。そして南にはハヤサ。王級「加護持ち」を二人も擁し、軍力だけなら大国にも引けをとらない中堅国である。

カインアンとの小競り合い、エチルへの侵略などにより、一時は他国との緊張が高まっていたオウミ。しかし四ヶ国が同盟を結んだ今、大陸中央の政情は落ち着いていていい。

「国政が落ち着いたらからな、区切りをつけるにもちょうどいいだろう」

マティサはミアーナを振り返った。

「嫁も反対する気はないな？」

「ええ。反対はしないけど……なんかこう、手順をすつ飛ばしたような……」

ミアーナの頭の中は、疑問符でいっぱいだった。

「もっとこう、何かがあったはずなのよ……なのに、いくつかのイベントすつ飛ばしてエンディング

グに入ってしまったような……」

言葉にできない心情に、ミリアーナは苦悩した。

マティサが呆れたように言う。

「お前は何を期待していたんだ？」

「いろいろ」

親密度を上げていく嬉し恥ずかし突発イベントとか、恋心を自覚しての悶絶イベントとか、その果ての告白とか、二人っきりのどきどきデートとか——それらをすっ飛ばしての結婚宣言。

しかもミリアーナが攫われて救出されたのち、一夜にしてのことである。

この短時間で、二人に結婚を決意させる何かがあったに違いない。

「本当に、いったい何が……」

「だから、それは流せ！ 突っこんでやるな！ 気の毒だから！」

主にかばわれたコシスは、羞恥のあまり目を伏せた。

「……とにかく、結婚は許す。嫁も異存はないな？」

「ええ、かまわないわよ」

ミリアーナは気持ちを切り替えた。

もともと二人をくつつけようと画策していたのである。目的が達成されたのであれば、喜ばしいことだ。

「それで、結婚後の希望があれば聞くけど？ 仕事はどうする？」

ミリアーナが尋ねると、クラリサが口を開いた。

「わたくし、結婚後もお嬢様にお任せしたいのですが、叶いますでしょうか？」

「私は問題ないわよ。クラリサが残ってくれるなら、ありがたいわ」

ミリアーナはコシスに視線を向ける。

「クラリサ殿の希望であれば、わたしに依存はありません」

「ということなんですけど、婿様は？」

ミリアーナの問いかけに、マティサは頷いた。

「かまわん。そういうことでもいいな」

こうして主夫婦からの許しは出たが、結婚までの道のりはまだ遠い。

まずは親族の了承がある。コシスの両親とクラリサの両親の許可。

それから役所に申請を出して、結婚許可証をもらわなければならない。

さらには式場を押さえて、式の準備、友人知人への招待状の発送に、結婚後の生活の準備……

「クラリサのご両親にはもう挨拶してあるし、もともと結婚にも乗り気だったから楽勝ね♪ コシ

スのご両親はこれからだけど、きつとトリスさんが後押ししてくれるわ」

ミリアーナはいたずらっぽく笑った。

事前に外堀を埋めておいたのはミリアーナだ。

以前、降ってわいたクラリサの縁談話。それを潰すためにコシスに恋人役をやらせたので、クラリサの両親は、二人が恋仲だと信じている。

一方、コシスの異母弟であるトリスにも、たびたび二人の仲をおわせてきた。

さらに、四ヶ国同盟の調印式と新年の祝いを兼ねた祝宴で、ミリアーナはクラリサに銀糸の縫い取りのある水色のドレスを着せた。クラリサの隣には、銀髪に水色の瞳のコシス。周囲の人間は、二人がそういう仲だと認識したに違いない。

(ふふふふふ、外堀を埋めたか良かったわ)

ミリアーナが内心笑みを浮かべていると、コシスが苦い顔で言う。

「足場を固めてから結婚を、と言いましたばかりで、前言を撤回するのは何やら気まずいのですか……」

「ああ、そういうえば、そんなことを言ったのよね」

王都からダイテスに来る際にすべてを処分し、弟に家督を譲ったコシス。

身分が不確かなため妻帯するにはふさわしくない、足場を固めてからの結婚を望んでいる——恋人役を演じた際、コシスはクラリサの両親に、まだ結婚ができない理由をそう説明した。

マティサの従者という身分に変わりはないのに、ここで結婚を言い出すのは気が引けるのだろう。

「……確かに、それはちよつと言いつづらいわよね……」

ミリアーナは眉をひそめた。

「でも、結婚が早まる分には文句も言われないんじゃない？ ほら、クラリサの母親もなるべく早く結婚してっってお願ひしていたし」

コシスを気に入ったクラリサの両親は、二人の結婚を待つとは言ったが、早く孫の顔が見たいと

も言っていた。

「そうではございますが……」

コシスが渋い表情を浮かべていると、マティサが口を開いた。

「なら、ちようどいい。軍に復帰しろ」

「我が君？」

訝るコシスに、マティサは説明する。

「舅は近々隠居する。爵位を継いだ後には、王からの要請を受け入れるつもりだ」

「軍に復帰なさるのでございますか？」

コシスの顔が喜びに輝く。

「そうだ」

マティサは鷹揚に頷いた。

現当主のグライム・ダイテスが隠居を言い出したのは、昨夜のこと。

昨日、ミリアーナを攫ったのはマティサの復権を望む貴族だった。二度と同じことが起きないよう、グライムはマティサに爵位を譲る決意をしたのだ。

公爵位を継ぎ、はつきりオウミ王の臣下となつてしまえば、マティサが王族として復権する可能性はほぼなくなる。

例外は、王太子である弟ジュリアスが死亡した場合のみだ。

結果として、グライムはマティサ復権派に対して最大級の意趣返しをした。

またオウミのユティアス王は、以前よりマティサの軍復帰を望んでいた。

ユティアスは王太子親衛隊を再編成し、マティサが王太子であった頃から仕えている古株の隊員たちを独立騎兵隊として分離。マティサはその騎兵隊の隊長になるよう要請を受けたものの、理由をつけて固辞していた。

廃嫡されたマティサがなんらかの形で功を立てれば、廃嫡は間違いだった、復権させると騒ぐ者が出てくるからだ。

そうなると、再び騒動が起きるだろう。

マティサは、ジュリアスの地位を脅かすつもりなどない。たった一人の大事な弟だ。

面倒事を回避するためなら、辺境に引っこむのも厭わない——そう考えていたのだが、状況が変わった。

復権する可能性がほぼゼロとなった今なら、軍に復帰して独立騎兵隊を率いてもかまわない。

一方コシスもまた、独立騎兵隊の副将にと要請を受けていた。

しかしコシスが軍へ復帰するには、ダイテス公爵家の従者を辞めなければならない。

それ故に、コシスも軍復帰を固辞していたのだ。

マティサは、コシスを見据えてこう続けた。

「ダイテス公爵家からは暇を出すことになるが……俺はお前以外の副将を持つ気はない」

「我が君……」

コシスは頬を薄く染め、体を小さく震わせた。

「御意」

万感の思いを込め、コシスは一言だけ返して頭を下げる。

（たらした！ 誑かした！ 婿様、今のは絶対コシスを口説いていたわよね、クラリサ！）

ミリアーナは内心絶叫した。

口には出さなかったが、マティサとコシスのやりとりを萌えたのだ。

とつさにクラリサを見れば、彼女もミリアーナの視線を受け止めて、瞳を輝かせる。頬を染め、こくこくと何度も頷くクラリサ。

目と目を合わせれば、互いの考えはわかる。

きっと同じことを感じていた。

武人としての力量や能力、人物を見て、自分の副将となれるのはコシスしかいないと買っているマティサ。

そこには色事など介入していない——いないのだが——そこに萌えを見出すのが、腐女子の腐女子たる所以。

（お前以外の副将を持つ気はないって、『お前だけだ』って意味よねえええ！ 婿様ったららしい！ でもそこがいい！）

ミリアーナは歓声を上げそうになるのをこらえ、気を抜くと緩んでしまう頬を必死に引き締めた。マティサとコシスはミリアーナたちの挙動に不審を抱いたが——それを追及することはなかった。世の中には知らないほうがいいこともあると、思い知っていたからである。

オウミ王国の北の辺境を治めるダイテス公爵家から、現当主グライムの隠居と、マティサの爵位継承について許可を求める申請が出された。ダイテス公爵令嬢の誘拐騒ぎがおさまった次の日のことである。

報告を受けたユティアス王は、翌日、伺候に訪れた息子に尋ねた。

「突然だな」

マティサは、頭を下げて答える。

「はい。こたびの事件が公にはこたえたようで、今後、おかしな企みをする者が出来ないようにと隠居を決意したそうです」

ミリアーナが攫われた際、ユティアスは動かせるだけの影——密偵を動かした。しかし結局、彼女を発見し救出したのはダイテス公爵家だった。

迅速に行動した公爵家はすぐさま手がかりを見つけ、様々な伝手による尽力も得て、その日のうちに事件を解決した。

ダイテス公爵家の影響力は想像以上で、王室直属の影など物の役にも立たなかった。

むしろ、公爵家の実力を思い知らされたと言ってもいい。その実力がマティサが婿入りした後に

備わったものなのかはわからないが、決して蔑ろにしていいものではない。

グライムの意図をマティサから聞いたユティアスは、頷いた。

「ふむ……確かにそれは最善の手であるな」

マティサが公爵となった暁には復権の可能性が消え、今後、いくら功を立てようと臣下としてものになる。そうなれば、ミリアーナにいらぬ手出しをする者もいなくなるだろう。ミリアーナをどうしようとしたところで、マティサの身分は変わらない。

ユティアスは、マティサを復権させるのは無理だと思いはじめた頃、独立騎兵隊を作った。マティサとミリアーナの夫婦仲は非常によく、離縁する気などさらさらなさそうである。

四ヶ国同盟がなされた今、周辺国との関係も落ち着き、これならジュリアスが王太子でもやっていけるに違いない。ユティアスは、マティサの爵位継承を認めた。

「爵位の継承について、特に問題はない。すぐに許可が出るだろう」

ユティアスが言うと、マティサが礼を取る。

「ありがたき幸せにございます」

マティサは、公の場で臣下としての礼を守っている。父との対話であっても、その態度は崩れない。

「これで、そなたが公爵となる。そなたを王太子に推す者も、いなくなるであろうな」

「はい」

ユティアスは、少し寂しさを覚えた。王にとつては、マティサも息子の一人。辺境へと遠ざけたが、それは決してマティサを嫌ってのことではなかった。

廃嫡され、オウミ王国の北の地に婿入りした息子。しかし目の前のマティサから、元の身分への未練など欠片も感じられなかった。そのため、王は切り出した。

「ならば、爵位を継いだ後でよい。軍に戻らぬか？ そなたのためならば、独立騎兵隊はいつでも長の座をあけるであろう」

「御意」

マティサの返答に、ユティアスは我が耳を疑う。

「何？」

これまで何度か同じ内容を打診したが、いつも息子は渋っていた。それが今回は即答である。

「菲才の身ではありませんが、陛下のご期待にそえるよう精進いたします」

「菲才？ 誰が？」

様々な才を天から与えられたような息子が何を言うか。

——そう思ったユティアスだったが、わずかに唇を震わせて感情を押しとどめた。

「ついに受ける気になったか」

「はい。爵位を継いだ後であれば、問題はないかと」

独立騎兵隊は、もともとマティサを軍へ復帰させるためだけに作った隊だ。そのため、マティサの元部下たちで構成されている。

これまで王妃派を憚っていたせいか、マティサが正式にこの隊へ所属することはなかった。とはいえ、日々訓練を施しているのも、戦場で率いるのもマティサである。マティサを隊長に据えても、

違和感はない。

ユティアスは鷹揚に頷いた。

「あるべき姿に戻すというわけか。どこからも文句は出まい」

「つきましては、コシス・カティラを軍へ復帰させ、我が副将に据えることをお許しください」

マティサの言葉に、ユティアスは思わず身を乗り出した。

「コシス・カティラをか」

王にとって、その申し出は願ってもないことだった。

「はい。右腕を頼むのはコシス・カティラのみでございます」

「それは、こちらから頼みたいところだ。彼の者は埋もれるには惜しい人材」

マティサとコシスの復帰。まさしく朗報だった。

「コシス・カティラには、新たに爵位を与えよう。それならば、副将に据えるのに問題はない」

「爵位でございますか？ しかしコシス・カティラは、子爵位を弟に譲っております」

「それ故だ。士分だけでは副将に据えられまい。そもそもコシス・カティラは、爵位を与えられてもおかしくない功をすでに立てておる」

騎士として軍に所属するか、文官として国に仕えると士分を得ることができ、さらに功を立てた者には爵位が与えられる。士分しか持たない者も貴族であることに変わりないが、隊の副将となる以上、功を立てた証がなければならぬ。

ユティアスは恨みがましくマティサを見た。

「クスキではカイナンを追い払い、ランカナ戦でもそなたの副将としてふさわしい働きをした。それらの功には報いねばならん。だというのに、論功行賞を蹴飛ばしおつて。示しがかんではないか」
オウミの東に位置するクスキ砦がカイナンに攻められた時、確かにコススは素晴らしい働きをした。また、オウミ王太子の誘拐事件を発端に巻き起こったランカナ戦でも同様である。

マテイサは、軽く肩をすくめた。

論功行賞を蹴飛ばしたのはマテイサであり、コススはそれに付き合っただけだ。

ユティアスはマテイサへの褒美として、王都の屋敷を与えた。しかし、コススにはまだ何も褒美を与えていない。

「コスス・カテイラには男爵位と領地、さらには独立騎兵隊の副将の地位を与える。そしてそなたは、爵位を継ぐと同時に独立騎兵隊の隊長となるがいい。これは決定だ。よいな」

「御意」

こうしてオウミは、優れた将を取り戻した。



結婚には当人同士の同意の他、家の許しも必要となる。

貴族となると、むしろそちらのほうが重要視されると言っている。

コススとクラリサが結婚を決めた今、両家に挨拶をしなければならぬもの、少しばかり問題

があった。

ミリアーナはクラリサに尋ねる。

「まずは王都にいるトリスさんに挨拶するのが先かしら？ それからクラリサの両親に挨拶へ行くほうがいい？」

カテイラ家の家長は、王都にいるコススの異母弟トリスである。カテイラ家の許しはトリスにもらえばいい。

一方クラリサの両親は、ダイテス領から程近い田舎町で暮らしている。

クラリサの実家は、とある貴族の分家だ。シュライアという領地を持つ本家は、クラリサの父の兄が継いでいる。

「まずは便りを出しませんと」

クラリサが溜息をついた。

彼女の両親が住む町に便りを出すとすると、王都から四日か五日はかかる。

往復だけでも十日は見ておかなければならない。返事が届き、ここからその町へ行くことを考えれば、どれだけ時間がかかるものか。

ダイテス以外の地で、まだ郵便制度は生まれていない。

この世界では、そもそも識字率があまり高くない。

読み書きができるのは、王侯貴族、商人や一部の裕福な者だけである。

貴族は領地運営に関わる事項を書類として記録していかねばならず、商人は商売の記録を残して

取引の証とする。

それらの必要がない者にとって、読み書きは不要なものなのだ。そのため、たとえ郵便制度がこの世にあったとしても、利用する人間は限られる。もう少し識字率が上がらねば、商売として成り立たないだろう。

では、読み書きのできる者たちは便りをどうやって届けるのか。

裕福な者なら人をやって届けさせるが、そうでなければ、送り先方面へ行く用事のある者に、ついでに頼む。

クラリサの両親に便りを届けてくれる人を探すには、それなりに手間がかかる。しかし、人を雇うにも費用がかかる。

クラリサが溜息をついていると、ミリアーナが提案した。

「今だったら、バイク便が使えるわよ」

ダイテス領と王都の連絡は主に無線で行われているが、口頭での説明だけでは片づかないこともある。そんな時にはダイテスで育てた密偵に書類を託し、ダイテス、王都間を走らせている。密偵たちは街道から外れた獣道をバイクで走っているのだが、およそ三、四時間もあれば片道を走破できる。この世界では異例の速さだ。

ちようど今、新米密偵のチタが王都の屋敷にいる。

「バイク便はダイテスの秘密のひとつです。私事に使わせていただくわけには……」

クラリサは躊躇したが、ミリアーナは時間を優先させた。

「かまわないわよ。クラリサの両親のところなら、ダイテスに向かうついでに、ちよつと寄り道する程度じゃない、一時間もかからないわ。バイク便を使わないと片道四日はかかるでしょう？」
クラリサの両親の住む町は、行き先の途中にある。近くまでは人目につかないよう裏道を使い、途中から徒歩で行けばたいして時間もかからないだろう。

クラリサは少し考えこんでいたが、結局頼むことにした。

「お願いいたします」

ミリアーナは頷く。

「ついでに、翌日にダイテスからのバイク便を手配しておきましょう。ご両親から返事がないか御用聞きに行かせれば、三日もかからないわ」
便りは、書くよりも届けるほうが難しい。

ダイテスには郵便があるし、交通手段が発達しているおかげで人やものの移動も速い。午前中に小包を出したら、遅くとも翌日には必ず届く。今のところ送り先は領内に限定されているが、前世の宅配便並みの速さである。

また無線や電話を使用すれば、すぐに相手と連絡が取れる。

余所の地域とは、まるで違う。

郵便、電話、無線、汽車、自動車——それらは、ミリアーナの暮らしていた前世の世界でも、近世以降にできたものである。中世ヨーロッパに近い文明しかないこの世界には、本来ならまだないものなのだ。

正直なところ、ものすごく不便。

「ああ、もう、連絡だけでこんなに手間がかかるなんて！ 余所の地域もダイテス並みに発展してほしいわ！ 不便だったららない」

ミリアーナが嘆けば、クラリサがどこか達観したように言う。

「お嬢様、ダイテスが特別なのですわ。正直、便利すぎて困ります。余所へ行けなくなりますわ」

「まあ、そうなんでしょうけど……」

ミリアーナがダイテスを発展させてからというもの、領民が他領地へ移住することがほぼなくなりました。

移民の多くは地元で暮らしが成り立たないから余所へ行くのだが、ダイテスにはものが豊富にあり、仕事も多い。他の土地に比べて、暮らしが格段に楽なのだ。

その暮らしを知ってしまえば、不便の多い余所の地で生活しようなどと誰も考えない。

「ダイテスの技術が流出したら、市場や経済に重大な影響を与えてしまう。そのリスクをコントロールできないから駄目だとおっしゃったのは、お嬢様です」

「うん。そうなんだけどね……」

ミリアーナは遠い目をした。

革命的な発明には、リスクもつきまとう。

前世の歴史を紐解けば、とある発明がその後の歴史に大きく影響を与えたり、市場経済を混乱させたことがあった。

ダイテスには、それらの対処法をあらかじめ知っているミリアーナがいるので問題ない。しかし領地の外でそのような混乱が起きれば、歴史が示した通りの被害が起きる可能性がある。

技術を提供するなら、それにもなうリスクと対処法も教えるべきだが、相手がその通りにやってくれるとは限らない。

提供する技術と相手は厳選しなければならないだろう。

ミリアーナは溜息をついた。

「何もかも一気に、とはいかないわよね……」

「なんの話だ？」

「ひゃん！」

突然声をかけられて、ミリアーナは驚いた。

振り返れば、マテイサとコシスが立っている。

ミリアーナとクラリサは、王都の屋敷の居間で話をしていた。

王宮から帰ってきた二人が顔を出してもおかしくはない。

「お帰りなさい。届けは出してきたの？」

マテイサは、公爵位を継ぐための申請をしに王宮へ足を運んでいた。ミリアーナが尋ねると、マテイサは頷く。

「ああ、受理はされるだろう。そっちは？」

「クラリサの両親への連絡方法を相談してました。ご挨拶は早いほうがいいでしょう？ なるべく

すぐに便りを届けられないかと」

「そうか」

マティサは椅子に腰かけた。どことなく疲れているように見える。

「何かありました？」

マティサはミリアーナの質問には答えず、聞き返した。

「どれくらいで連絡ができる？」

「バイク便を使えば、明日には届くはずですよ」

ミリアーナが答えると、マティサは眉間にしわを寄せる。

「婿様、バイク便を使うの、反対ですか？ でも、さすがにチタ君だって考えてくれると思いますよ。ダイテスの秘密を晒すような真似はしませんわ」

ミリアーナは、とりあえずマティサに意見を仰いだ。

「ああ、いや、そっちはいい。ばれなきゃ何してもいいぞ」

あっさり許可を出すと、マティサは物憂げに頬杖をつく。

「婿様、では何がまずいんですか？ パパンの引退と婿様の爵位継承、ついでに軍への復帰も受理されるだろうって言ってましたよね？ ……まさかとは思いますが、コシスの実家のことですか？」

ミリアーナは不安になった。

コシスの異母弟であるトリスは、コシスとクラリサの仲を取り持つことに反対していなかった。

だから、当然すんなり結婚の許可を出すものと思っていたが、そうではなかったのだろうか。

マティサが躊躇いつつ口を開く。

「まあ、そっちなもだが……いろいろと面倒なことになった」

「はい？」

ミリアーナは首を傾げた。

「……コシスの軍復帰にともない、男爵位と領地が与えられることになった」

「ほえ！」

ミリアーナは目を丸くした。

「今までの褒美だそうだ」

「え？ ああ、一昨年のカイン戦と去年のランカナ戦の」

ミリアーナは、コシスがマティサに合わせて、今までの論功行賞を蹴飛ばしてきたことを思い出した。

二度の戦いで、コシスはマティサの副将として華々しい働きをしたと聞いている。

領地の一つを賜っても不思議ではないが――

「功には報いねばならんが……今、領地の選考を行っている。時間がかかりそうだ」

「それは……面倒ですねえ……」

コシスは、新たに男爵家をおこすこととなる。

国の直轄領のどこかを譲り受けるわけだが、男爵であるから領地はさほど広くないだろう。とは

いえ、もらったからには領地を管理しなければならない。

コシスが軍に復帰するとなると、領地運営は家臣に任せざるしかない。当然、それまでその地を管理していた役人は全員引きあげるのだから、本当に一から任命していかねばならないだろう。つまり、コシスは家をあずけるための使用人と、領地を治めるための家臣を雇わなければならないのだ。もちろん、ただ領地を与えるだけでなく、家臣を集めるための一時金くらいは王家から出るだろう。それでも、人を集めるといふことは大変なのだ。

この世界では、識字率が低い。

しかし領地の管理運営をするには、記録、計算は必須。そういつたことのできる人間は限られている。その雇用は早い者勝ちで、新興の家には荷が重い。また給金も高額になる。

伝手を頼つても、必要な人数をそろえるのは難しいだろう。

ミリアーナは思わずコシスに同情した。

「この屋敷の人間は無理だけど、領地のほうからなら、ちょっとは人を回してあげられるわよ？」

「あ、いえ、まだ賜る領地も決まっておりますので。人を集めるのは、決まってからにしようございませす」

コシスはミリアーナの申し出を断った。

「国内のどこに行くことになるのかもわかりませんが、人は集められません」

「ああ、それもそうね」

国が直々に治めている直轄領も、結構広いのだ。

北はダイテスのすぐ側の地から、南は先般オウミの領地となったニーレンまで。西はエチルとの国境沿い、東はカインンの近くにまである。

どこに行くのかわかっていなければ、確かに人は集まらない。

雇われた後にとんでもない辺境に行くと言われたら、逃げ出しかねない。

しかし、最初からわかっていれば覚悟もできるだろう。

「ん〜まあ、それはそれとして、『そっちも』ってことは、まだ何かあるのよね？」
嫌な予感に、ミリアーナは眉をひそめた。

「はい……」

コシスが渋面を作る。

「実は……登城した折、トリスにクラリサ殿との結婚の話をして、挨拶に行くのに都合のよい日を聞いたのですが……」

「まさか、トリスさん反対したの!？」

あまりの暗い雰囲気、ミリアーナは不安になる。

しかし、コシスが手を振って否定した。

「あ、いえ、結婚の話自体は喜んでくれました。もちろん反対などいたしません……いたしません
が、逆に面倒なことに……」

「だから、何があったの?」

ミリアーナが問いつめれば、コシスは溜息をついた。

「領地から両親を呼ぶので、それからにしてほしいと……」

「ほえええええ！ りよ、両親！ コシスの！」

ミリアーナは驚愕した。

カティラ家の現在の家長はトリスだが、兄弟の両親は健在である。

コシスの母親は産後の肥立ちが悪く、コシスを生んですぐに亡くなった。その後、父の後妻に入ったのがトリスの母親だ。

義母ではあるが、コシスとの仲は悪くない。

生まれてすぐに母と死に別れたコシスにとって、『母』といえはこの義母を指す。よくできた人らしく、なさぬ仲のコシスを大事に育てたという。

一方、父親は実直な武人で、トリスはこの父親に似たようだ。

両親は家督をコシスに譲ってカティラ領に引っこみ、その後、コシスもまた弟に家督を譲った。

「その、喜ばしいことであるので、ぜひ両親にも立ち会ってほしいと……気持ちにはわからなくてもなのですが、時間が……」

コシスは溜息をつき、経緯を話しはじめた。

主であるマティサが王と謁見している間に、コシスは独立騎兵隊の詰所でトリスと会った。

「トリス、わたしはクラリサ殿と結婚しようと思っっている。それで、許可をもらいに行きたいのだが、挨拶に行くにはいつ頃がいいだろうか？」

トリスは、コシスとは似ていない茶色の目を丸くした。

「兄上ええええ！ 結婚ですと！ それはまことですか！ ついに、ついに兄上がその気に！」

縦にも横にも大きい巨漢のトリスは、兄に詰め寄った。

一点の曇りもない、輝く笑顔である。

「あ、ああ、そうだ。クラリサ殿と約束して……」

「クラリサ殿、感謝しますぞー！ どうか兄上とお幸せにー！」

トリスは、吠えながら両手を天に向かって突き上げた。

どちらかといえばおっとりしているトリスがここまで興奮するとは珍しい。

コシスは思わず腰が引けた。

「お、落ち着け、トリス」

奇声を上げつつ何度も両拳を突き上げていたトリスは、はたと手を止めた。

「父上と母上に報告せねば！」

ようやく正気に戻ったのかと、コシスは安心する。

「そうだな。領地の父上と義母上にも便りを——」

「兄上、父上と母上も王都に呼びましょう！ きっとお二人も、クラリサ殿に会いたいはずですよ！

挨拶はその時に！」

名案とばかりにトリスが叫んだ。

「いや、それは後の顔合わせで——」

「クラリサ殿のご両親にも挨拶せねば！ 大事なお嬢さんをいただくのですから、感謝し、誠意を示さねば！」

弟の暴走っぷりに、コシスの顔が引きつる。

「うむ。当然考えているが——それはわたしがなすべきことだ。親族の顔合わせも当然するが、双方の許可が出てからで——」

「これほどの吉報、早く報せねば！ 早馬！ 早馬をおおお！」

トリスはまったく落ち着いていなかった。

「待て、トリス！ 落ち着け、落ち着くんだ！ わたしの話を——トリスうう！」

コシスは、喜びのあまり暴走する弟を止められなかった。

叫びながら話所を飛び出していくトリスを、なす術もなく見送ったのである。

事の次第を聞いたミリアーナは額を押さえた。そこまで心配してたのか、トリスさん。

「うん、そっちで来たか……反対じゃなくて歓迎なんだろうけど……」

カティラ領へトリスが便りを出し、両親からの返事が来て、その後に領地を出るとして——それなりにお年なのだから、若い者と違って移動にも時間がかかる。

コシスの両親に挨拶できるのは、いつになるのだろうか。

とはいえ、トリスの気持ちもわかる。

カティラ家は、家族仲がとてもしらしい。

尊敬する兄の結婚の報告を、愛する両親に直接伝えたいという思いなのだろう。

トリスは、実に素直なところがある。

頭では、そうわかっているのだが……

「なんで？ ……コシスもクラリサも、気持ちは固まっている。クラリサのご両親、コシスのご家族だって、だくれも反対してないのに、むしろ祝福してんに、どうしてこんなに結婚が遠いわけ？」

ミリアーナは思わず拳を握った。

「嫁、普通、結婚とはそういうものだ」

マティサはミリアーナの肩に手を置いて慰めた。

ミリアーナたちの結婚には、マティサの廃嫡という特殊な背景があった。そのためマティサは、ミリアーナとの結婚を言い渡されてから十日ほどで式を挙げている。

一方、ミリアーナは結婚の話聞いた翌日が式だった。

普通はこれほど慌ただしくない——というより、時間がかかるものだ。

両家の許しを得て、式場を押さえ、親戚知人に招待状を送り、参列の確認を取る。

それだけで、どれほどの時間が費やされるか。

さらには結婚式の衣装だの、当日に必要なものの手配だの、やるべきことは山積みなのだ。

困難はこれからであった。

コシスの場合は、この他にもさらに面倒事が待っている。軍への復帰の準備、叙爵、新領地の体制作り——

自分のことではないが、ミリアーナは思わず遠い目をした。

「……道は遠いわ……」

「そうだな……」

マティサも腹心のこれからの思い、遠い目をした。

「あ、あの、お嬢様……」

その時、真つ青な顔をしたクラリサが、小さく震えながら切り出した。

「もしかして、このままコスス様と結婚した場合、わたくし、男爵夫人になるのでしょうか？」

「あ！」

ミリアーナは目を丸くした。

「あっ」

今気がついたと言わんばかりに、コススも声を上げる。

「ああ……」

納得したように声を漏らしたのは、マティサだ。

三人は、しばらく視線を交わし合った。

確かにコススが男爵位を賜れば、クラリサもまた男爵夫人となる。

「どっ、どうしましょう！ そんな、畏れ多い！ わ、わたくし、そんなつもりではっつ！」

錯乱したクラリサがミリアーナに泣きついた。

士分を持つだけの騎士と男爵では、かなり違う。

貴族であるものの、領地を持たない士分。

一方、男爵には領地がつく。

それだけの違いだが、その差は大きい。

男爵は領地を支配できるが、負わねばならない義務もまた大きいのだ。

クラリサが混乱するのも無理はない。

「わたくし、身分目当てだとか、分不相応とか言われてしまうのではないのでしょうか？ それ以前に、わたくしに男爵夫人としての采配ができるでしょうか？ あああああ、どうしましょう！ どうしましょう！ お嬢様あああああ！」

「落ち着いて、クラリサ！」

ミリアーナは錯乱するクラリサを抱きしめた。

「だって、相手はコススなのよ！ どうしたって、嫉妬されるのは避けられないわ！ 爵位があるうとなかろうとやかまされるわよ！ だって、コススだもの！」

「それは、どのような意味でございますか？ お方様」

あまりの言いようにコススは突っこみを入れた。

「それもそうでございますわね」

クラリサは少し落ち着いたようだった。

「なぜ、それで落ち着くのですか！」

コススは驚愕する。

「だって、コシスだもの」

ミリアーナは知っている。

あまりにハイレベルな男の妻になるというのが、どれほどのことか。

コシスは、はつきり言つて美丈夫である。それこそ作りものじみた、硬質な美しさを持つ。見事な銀の髪に、薄い水色の瞳。肌の色は白く、銀細工のような。

背が高く、細身に見えるものの、引き締まった体つきをしている。

知的で礼儀正しく、武人としての技量も確か。

さらには、王級に準じる「加護持ち」だ。

身分を切り離しても、これだけのスペックを誇るのである。

コシスがコシスであるだけで、その妻となる者は妬まれるだろう。

「できすぎた夫を持つには、覚悟がいるのよ」

思わず力説するミリアーナであった。

「どんな覚悟だよ……」

ぼやいたマティサを、ミリアーナは恨みがまく横目で睨む。

コシスをも上回る、ハイスベックな婿である。

ミリアーナの苦勞の幾分かは、きつと婿様のせい。

ミリアーナはクラリサに視線を戻し、優しく尋ねる。

「クラリサは、それでもコシスがいいでしょ？」

「はい……」

恥じらいながらも、クラリサははつきりと答えた。

「だったら、覚悟するしかないわよ。大丈夫！ 領地経営は私が教えてあげるわ！ 貴族の夫人として恥ずかしくないよう、きっちり伝授してあげる！」

ミリアーナは拳を握って請け負った。

ミリアーナも公爵令嬢である。貴族の妻としての心得をしつけられて育った。ただ、実践していないだけで。

「でも、お嬢様……」

クラリサが憂い顔で首を傾げる。

「お嬢様の教えが役に立つでしょうか？ お嬢様は世間一般の『夫人』ではございませんし……」

「クラリサ！ ひどい！」

悲鳴を上げるミリアーナの横で、マティサとコシスはクラリサの言葉に納得してしまった。

ダイテス領はかなり特殊な領地である。

そして、領地を魔改造したミリアーナもまた特殊。唯一無二な存在だ。

果たしてその教えが役に立つのであろうか――

「道は遠いな……」

「さようにございます」

主従は、そろって遠い目をした。

クラリサは、便りを出してから三日と経たず、実家からの返事を手にした。

彼女からの便りをシュライア家に届けたチタは、「明日、友人が王都に向かうはずだから、ここに寄るよう言うておく」とことづけた。

そして翌日、ダイテスから王都に向かう新米密偵のバイク便がシュライア家を訪れ、返事を受け取って王都のダイテス領館にたどり着いたのである。

異例の速さであった。

両親からの返事に目を通したクラリサは、ミリアーナに相談した。

「あの、両親が大変喜びまして……コシス様にご足労願うのは申し訳ないので、こちらにうかがうと言ってきたのですが……どうしましょう?」

「……さらに面倒なことになってるしっ!」

ミリアーナは頭を抱えた。

クラリサの両親の気持ちも、わからないではない。彼女の父は十分しか持たない下級貴族。

これから男爵になるコシスの身分は申し分ない。

むしろ、すぎるほどの良縁だ。

「王都に来るわけね……宿のあてはあるのかしら?」

普通、貴族が余所の地へ行く場合、親類縁者や知人などの屋敷に泊めてもらう。

知り合いのいない場合は宿に泊まるのだが、王都の宿は満室であることが多い。とはいえ貴族である以上、それなりの宿に泊まらなければ面目が立たない。

ミリアーナの問いかけに、クラリサは困ったような表情で答えた。

「それが……さすがに王都に知り合いはいません。どこか宿を見つけないと……」

「じゃあ、うちに泊まってもらう? 客室はあいてるわよ」

「いえ、そこまでご迷惑はおかけできません。わたくし、一介の使用人でございますから。それに、うちの両親にダイテスの秘密を晒すのは……」

ミリアーナの申し出をクラリサは断った。

「湯沸かし器に水道、厠には、すべてのお客人が驚かれましたわ。皆様、言われずとも秘密にしてくださいましたが、うちの両親にはさすがに……」

王都にあるダイテスの屋敷は、ミリアーナが徹底的に魔改造させたシロモノだ。

各部屋には電灯と水道が備えつけられ、トイレは水洗、風呂にも湯沸かし器がついている。それらを見たこの世界の常人は、驚倒するだろう。

さらには、無線基地、地下の秘密駐車場に並ぶ自動車とバイク。これらは、絶対に人目に晒せない。

「……それがあつたわね……」

ミリアーナは、額に手をあてた。

今までダイテス領館に泊まったのは、オウミのジュリアス王太子、ハヤサのトウザ王太子、カイナンのキリム、カガノのケイシに、ランカナのナシエル。

皆一様に、屋敷の設備に驚いていた。

ナシエルはそのままダイテスに仕えることとなったので、もちろんそれを口外していない。そして残りの四人も、全員口をつぐんでくれている。

彼らはこちらを慮おもんばかってくれているのだろうが、そういった気遣いをクラリサの両親に期待するわけにはいかない。

「……うちは、使用人の棟もみんなダイテス仕様になっちゃってるからなあ
使えない。」

そう結論づけてミリアーナは悩んだ。

とその時、背後から声をかけられた。

「どうした？」

「またこのパターンか……」

ミリアーナは思わず呟つぶやく。

声をかけてきたのは、帰宅したマテイサだった。

振り返ると、マテイサとコシスの姿がある。

マテイサは、軍復帰に関わる根回しや、爵位継承の準備などで各方面を回っている。コシスも同

様だ。

「お帰りなさい。いえね、クラリサの両親が王都に来たいんですって。でも、王都に知り合いがないらしいんで、うちに泊まってもらおうと思っただけ——」

「そのような畏れ多いことはできませんわ」

ミリアーナの言葉をクラリサが締めくくった。

「別にかまわんが？」

マテイサが言うと、ミリアーナが問題点を指摘した。

「相手は普通の人のよ。ダイテスに住んでいるわけじゃないから、ダイテス仕様の設備の話が表に出る恐れがあるわ」

「それがあつたか……」

マテイサは眉を寄せる。

ダイテス領館には、秘密が多すぎるのだ。

「でしたら、カテイラ家の屋敷に来ていただいては？」

コシスがそう提案した。

「え？」

「クラリサ殿のご両親です。せっかくご足労いただくのですから、ぜひカテイラ家——我が家にお泊まりください。トリスも否いなとは言いませんでしょう」

カテイラ家は、王都に屋敷を持っている。

現在の当主はコシスの異母弟トリスだが、兄の義父母となるクラリサの両親なら、きつと歓迎するだろう。

何より、ごく普通の貴族の屋敷である。ダイテス領館のような特殊な設備など一切ない。マティサとミリアーナも、王都に領館をもらうまでは宿泊させてもらうことも多かった。

「ご迷惑ではございませんか？」

クラリサが躊躇いがちに聞いた。

「いえ、迷惑など、とんでもない。わたしにとつても義父母になります方々です。これくらいのこととさせてください。それに、わたしの両親も領地から出てまいりますので、挨拶が一度にすませられます」

コシスは、クラリサの両親を招く利点を説いた。

「わたしの両親も、きつとクラリサ殿の両親に会いたがると思います」

「……では、お願いします」

クラリサは、恥じらいながらもコシスにそう頼んだ。

「いい雰囲気ね」

甘酸っぱい、とミリアーナはニマニマしながら二人を眺めていた。

「そうだな。このまま何事もなければいいが」

マティサは、静かに二人を見守るスタンスを崩さない。

「そういえば婿様、全然始いてませんね？」

ふとミリアーナは気になった。

マティサとコシスは、閨を共にすることもある仲だ。

二人の出会い、マティサが六歳になった頃。

王太子の学友の一人として、コシスは選ばれた。

当時九歳だったコシスは、初陣までマティサの学友として王宮で学び、初陣の後は騎士団に所属していた。

マティサが十五歳になって初陣を迎えた際、副官に抜擢されたのがコシスだ。

その時から、夜伽をするようになったという。

「当たり前だ。本来なら、臣下の婚姻の世話も主君の役目のひとつだぞ」

「ほえ？」

ミリアーナが首を傾げると、マティサはばつが悪そうに言う。

「配下の家が栄えるよう、婚姻にも気を使うのが普通だ。あのゲインでさえ、寵臣に婚姻をすすめるんだぞ？ コシスの場合は……事情が事情だから……コシスが望まないのであれば、口出しするつもりはなかった」

カイナンの王ゲインは、老若男女すべてを性愛の対象とする好色な王だ。

彼の寵臣の中には、いわゆるお手つきが盛大にいるのだが、婚姻を取り持ったりもするらしい。

ミリアーナは、マティサの言葉についてよく考えてみた。

そういえば、前世の世界の戦国時代、こちらの今と同様、衆道はごく普通のことだった。戦国武将が小姓を寵愛し、家臣に取り上げて家を持たせることもあった。

歴史に名を残した武将でも、小姓とそういう関係にあったという逸話が残っていたりする。家を残すために婚姻することと、気に入った者を寵愛することは、まったく別の話であったよ
うだ。

（そういうのと同じ感覚なのかな？）

「衆道はそれ、女色はこれって区別しちゃっているんですね」

ミリアーナの言葉に、マティサは少し考えこんだ。

「嫁、前に、女は嫌だがコシスだったら許せると言っただけ？」

「え？ ああ、愛人のことですか？ そうですね。余所の女は嫌だけど、コシスだったらいいですよ、私は」

貴族ならば愛人がいて当たり前だが、どこぞの知らない女は嫌である。しかし、コシスならかわない——

ミリアーナは以前、マティサにこう明言していた。

だって腐女子だから。

女相手の浮気は嫌だが、コシスならノーカンである。

考えてみれば、ミリアーナもマティサとコシスの関係には全然嫉妬していないのであった。「それとは立場が逆だが、同じようなものだと思うぞ」

「ん、男と浮気されるのは嫌だけど、女と結婚するのはいいと？」

逆というと、そういうことになる。

ミリアーナの言葉に、マティサは少し首を捻った。

「すまん、嫁。ちよつと違うな……」

口元を手をあてて少し考えた後、マティサは言葉を選んだ。

「俺は、コシスが自分で選んだ相手ならいいらしい。女でも男でも、それがコシスの意思ならかわない」

ミリアーナは目を丸くした。

「妬かないんですか？」

マティサが頷いた。

「うむ。考えてみたら、全然、嫉妬を感じない。自分でも意外だった」

「……そういえばコシスも以前、婿様が好んでするなら、誰と枕をかわそうが一向にかまわないって言っていましたよね？」

「言っただけ」

「……婿様とコシスの関係って、嫉妬とか、そういうものとは別次元なんですね」

ミリアーナは密かに萌えた。

マティサとコシスの信頼関係が、腐女子としてのツボにはまったのだ。

「ところで、事情が事情って、なんのことですか？」

先ほど、マティサは「コシスの場合は……事情が事情だから……」と言っていた。それが気になりミリアーナが尋ねると、マティサは決まり悪そうに視線を外した。

「……コシスの婚約が破棄されたのは知っているな？」

ミリアーナは頷いた。

「ええ、十八の時と聞きました」

マティサの学友に選ばれた時、コシスはすでに他家に行儀見習いへ行っていた。

そこから学友に大抜擢となったわけだが、その際、件の家の令嬢と婚約したのだ。

婚約者がいるのは、貴族として珍しいことではない。

極端な例ではあるが、仲のいい家にそれぞれ男女が生まれれば、すぐ婚約させることもある。

しかし、コシスの婚約は、婚姻には至らず解消された。

仔細についてミリアーナは知らない。以前聞いたが、不名誉なことであるから、とコシスは口をつぐんだ。

「コシスに非はなかったが……ひどいことになってな……以来、女性に対して苦手意識があったよ
うだ」

マティサはそう言葉を濁した。

かつて、コシスには婚約者がいた。しかし彼女は浮気し、相手の子供を身ごもったのだ。さらには浮気相手にも婚約者がいたため、三家の間で揉めに揉めた。

結局、浮気相手は責任を取らず、コシスの婚約も破棄された。

コシスの元婚約者は子供を生んだ後、もはや世間に出せないからと親が修道院に入れた。

この時、幾ばくかの金銭が動いたようだが、マティサも詳しくは知らない。

それ以来、コシスは女性に対して冷淡になった。礼儀正しく振る舞ってはいても、どこか一線を引いたような態度を取る。

あれだけのことがあったのだ、女性不信に陥っても仕方ない。

さらにコシスには、マティサの隊に入るまでの間、男から夜伽を強要され続けたという悲惨な過去がある。

色事全般に嫌悪を抱いても、不思議ではない。もともと、マティサと閨を共にする際には、そんな素振りなどなかったが。

「親にすすめられる縁談話を、コシスは片っ端から断っていたからな。コシスが望まないのであれば、無理に結婚をすすめるつもりはなかった」

「どうしてですか？ さつきは、それも主君の務めだつて言いましたよね？」

ミリアーナの問いに、マティサは洗面で答えた。

「……上が話を持っていけば、断れんだろうが」

「ああ、持っていった時点で決定なんですね」

「そうだ」

主が縁談を持っていけば、家臣は謹んで承るのが常識である。

たとえ本心では嫌でも、個人の感情など押し殺して家庭を築く。

上司の顔は潰せない。

——そういうものだ。

こうして冷え切った仮面夫婦が生まれたりする。

「俺はコシスの意思を尊重するつもりだ。だから今回、自分から言い出してきて、ほっとしている。ぜひ二人には円満な家庭を築いてほしい」

「ま、あたたかく見守りますか。何かあれば手助けする方針で」

「そうだな」

主夫婦はそう結論つけた。



コシスとクラリサの両親への挨拶が叶ったのは、それから十日ほど経ってからであった。

コシスの両親は、トリスの最初の報せを受けた時点で急いで早馬を出し、それと同時にとるものもとりあえず王都へ直行して、トリスに詳しい事情を聞いたらしい。

そして長らく縁のなかつた長男の結婚、叙爵、軍復帰という朗報に、泣いて喜んだ。

その結婚相手の両親が来ると聞き、さらに喜びを爆発させて、いろいろとあつたようだ。

客室を整え、おもてなしの準備を進め、シユライア夫妻の到着を今か今かと心待ちにしていたのである。

その様子を、主夫妻は疲れた顔のコシスから聞かされた。

軍復帰や結婚に向けた準備、男爵家をおこすための手配と、コシスはいろいろな重なり大変らしい。王級「加護持ち」に準じる「加護持ち」であるコシスは、二日程度なら不眠不休で働ける。しかし、その持久力、回復力をもつても、抗いがたい重圧があるのだろう。

一方、クラリサの両親もまた娘の結婚を大変喜んだ。

彼らはダイテス領から程近い、辺境の町に住んでいる。

ミリアーナの厚意により、便りのやりとりは、ダイテスのバイク便を使って異例の速さで行われた。しかし、本人たちの移動には四日ほどかかる。

とはいえ、クラリサの両親はめつたに行くことのできない王都への旅行ということで、非常に喜んでいて。

それに思いがけず、娘の婚姻相手の家に泊まれることとなった。

緊張と興奮が入りまじった旅路である。

ダイテス領館で暮らすコシスとクラリサの乗った馬車と合流し、カティラ子爵家の屋敷の前に立つた時、興奮のあまり、クラリサの母は倒れかかってしまった。

なんとか持ち直して屋敷に入ると、さっそく歓迎を受けた。

「ようこそいらっしゃいました、カティラ家によるこそ。お待ちしておりました。さき、お疲れでしょう。中へどうぞ」

見上げんばかりの巨漢が、満面の笑みでクラリサたちを出迎える。